

1400年続く秘密の祭事などをビデオに収め、歴史的記録として残す活動を展開。

一般社団法人映像通信は関西各地の自然や神社仏閣などの映像を撮影・編集し、無償で関係者に提供してきた。今年度は「伝統祭事」に力を入れ、これまでに撮影されたことのない祭事もビデオに収めることに成功。その活動は観光PRから歴史的・文化的資料を記録するものへと変化している。

外国人にも好評のウエルカムビジョン映像。

関西国際空港に到着した人は、ロビーにある大きなウエルカムビジョンに出迎えられる。京都、大阪、奈良などの城や神社仏閣やお祭などの映像が流れ、歴史ある場所に降り立ったことが直感的に伝わってくる。

これらの映像を撮影・編集しているのが一般社団法人映像通信だ。元NHKのカメラマンでディレクターである同協会代表理事の橋山英二さんが、関西周辺の名所をハイビジョンカメラで撮影し編集した素材を、地域の活性化と国際交流のために無償で提供している。当初はこれまで橋山さんが撮りだめたものを使用していたが、毎年撮影に出かけ、新しい素材を撮影しては四季ごとの編集を繰り返している。

「毎月10日間くらいは撮影をしています。桜や紅葉などその時期を逃さない対象もありますからね」と橋山さん。

現在、関西国際空港のウエルカムビジョンで流れているものは、「Welcome to Kansai」といわれ、日本語、韓国語、英語のテロップ入りの3バージョンがあり、いずれも3分程度の内容となっている。画質も構成も文句なしの美しい映像である。

また同様の映像素材は20分程度の「Beautiful KANSAI」に再編集され、各国領事館や国際交流団体、留学生にも配布されている。

「関西の見どころが散りばめられていて、わくわくしてくると観光客にも好評である。

こうした活動が徐々に認められ、橋山さんの元には観光スポットや文化事業、講演会、演奏会などの主催者からも記録映像の撮影の依頼が飛び込んでくるようになった。

初めて映像がとらえた聖徳太子由来の儀式。

一方で橋山さんが2011年度に力を入れたことは、関西近郊にあるさまざまな祭りや行事などの記録である。

「祇園祭りなど有名なものは映像もたくさんありますが、余り知られていないものの歴史的な価値がある祭事が関西には無数にあるのです。これらをきちんとした記録映像として残しておきたいと考えています」と橋山さんは言う。



関西近郊の名所や伝統祭事を収録した「Welcome to Kansai」と「Beautiful KANSAI」



毎月各地を飛び回り、貴重な映像を撮影し編集している

担当者より



観光から、歴史的に貴重な映像へ進化しています。

一般社団法人映像通信
代表理事
橋山英二さん

映像も観光目的だけではなく、歴史的な価値のある資料へと活用性も広がってきました。五穀豊穡を願うのは同じでもその表現は地域ごとに違うなど、深い内容にもなっています。小さな仕事ですが、大きな意義があります。AJOSCのご英断のおかげと感謝しております。



撮影が禁止されていた祭事等も収録し、貴重な映像資料となっている

テレビ局などが撮影するものは、ニュース映像として使用されることが多く、華々しいシーンのみが残り、祭事の全体像を見ることはできない。橋山さんはひとつひとつの祭事の初めから終わりまでを映像に収めて後世に残したいという。

例えば四天王寺では、毎年1月11日に「手斧（チョンナ）始め」という行事が行われる。古式作法にのっとり宮大工の仕事始めの儀式だが、通常は一般人の立ち入りも写真撮影も禁止であるが、橋山さんの熱心な説得により、本邦初の貴重な映像撮影に成功した。

この儀式は金堂を閉め切り、提灯の灯りだけで行われる。カラーでは映らないため、モノクロで撮影された。糸

引きなどの儀式が、四天王寺執事長の立ち会いのもと、正大工である金剛家によって行われていく。画面からも厳粛で張り詰めた空気が伝わってくる。1400年前、四天王寺建立の際に聖徳太子が百濟から呼び寄せた三人の工匠の一人を創始とする金剛家は、今なお続く世界でもっとも古い企業とも言われている。

このほか、生國魂神社の夏祭り、京都壬生寺の壬生狂言、廬山寺の鬼踊り、住吉大社の御田植神事など、伝統のある祭事を橋山さんのカメラはとらえていった。

「歴史の古い地域ですので、まだまだ残さなければいけない対象がたくさんあります。地域によって同じ祭事、例えば節分などでもぜんぜん内容が違うのです。ただ、撮影許可がおりないところもあるのが難しい」と橋山さんは嘆く。

観光PRに熱心なところばかりではない。神聖な儀式であるため、関係者以外には公開できないというものもあるからだ。

それでも、橋山さんは説得を続けている。こうした祭事の多くは日本の歴史や文化をひもとく鍵の一つであり、貴重な歴史資料として残すべきだという信念があるからだ。

「今の活動を続け、真摯な姿勢で取り組んでいくことで、いつか道も開けると思っています」

自分にそう言い聞かせながら、橋山さんは今日もカメラを片手に東奔西走している。